

# 令和2年度岩手県農政審議会生産流通部会 会議録

日時 令和2年12月25日(金)

14:00～15:30

場所 岩手県庁5階5-J会議室

## 1 開会

## 2 挨拶

藤代克彦農政担当技監兼県産米戦略室長があいさつを述べた。

## 3 議事

八重樫徹部会長が議長として議事を進行。

### (1) 岩手県果樹農業振興計画(案)について

佐々木誠二農産園芸課総括課長が、資料1-1、1-2、1-3により説明。

#### 【主な意見等】

##### ○佐藤崇史委員

資料1-3の担い手への支援の主な取組と結果について、新規就農者を確保できている要因はなにか。

##### ○佐々木誠二農産園芸課総括課長

田園回帰というところもあるが、農業に興味がわいてきている部分や、生産性が向上してきている部分があり、収益を上げてきている農家が出てきているので、そうした部分が新規就農者にいい影響を与えていると考えている。

##### ○佐藤崇史委員

私も新規就農世代だが、事業継承のために新規就農する世代が江刺で増えてきている。これが一回落ち着くと、新規就農の流れが止まるのではないかと感じている。

まるっきりの新規就農は果樹にとって、極めてハードルが高い。苗木を植栽後、できるだけ早く収穫に結びつけようと思っても、植栽の年に収穫できるわけではないし、整備をするのにもコストがかかる。植え替えは上手くいっているようだが、果樹でまるっきりの新規就農を考えるのであれば、更に使いやすいシステムなどが必要になってくると思う。

また、法人への就職という形での新規就農は、農業に携わるきっかけとなり、そちらの方がこれからは需要があり、岩手県の農業農村の発展に繋がると考えているので、引き続きご協力をお願いしたいと思っている。

○佐々木誠二農産園芸課総括課長

おっしゃられたとおり、新植後は3年程度経たないと収穫できないので、園地情報データベースの取組を提案している。

なかなかいらっしゃらないが、貸してもいいという園地について、樹がある状態で新規就農者とうまくマッチングできないかと考えている。花巻市ではそういった取組が一部始まっているので、そうした取組を進めて行きたい。

また、雇用での就農を希望する方もいらっしゃるので、法人経営体や大規模経営体とのマッチングといった取組についても、ご指摘いただいたとおり、実施していきたい。

○梶田佐知子委員

いろいろな会議に参加すると、消費拡大や周知方法にネットの活用についての記載があるが、年末のお歳暮や年賀状のやりとりをする年齢層は、ある程度の年齢の方になると思っている。

インターネットやSNSという話を聞くが、そういう年齢の方達は、パソコンを開かない。やはり口伝えといったものも多いと思うので、そういう部分にも目を向けていただきたい。

消費者からすると、そういう人たちが一番お金もあるし、やりとりもするというのを忘れないで欲しい。

○佐々木誠二農産園芸課総括課長

消費者交流を通じた消費拡大にも力を入れて行きたいと思っている。

ご指摘いただいたとおり高齢者の方は、SNSなどを使わない場合も多いかと思うので、その部分は工夫して取り組んでいきたい。

○藤代克彦農政担当技監兼県産米戦略室長

ご高齢の方や、お歳暮商品としては、岩手県でも高級果実として、冬恋やシャインマスカットなどが出てきている。冬恋については、カワトクなどで冬のお歳暮商品として、ナンバー1となっている。りんごとしては高額であるが、そういった取扱いで、単価、売り上げが伸びている。そういったアプローチは忘れずにやっていく必要があると考えている。

○渡邊るみ委員

インターネット、販売経路について、全然違う意見になってしまうが、今年はコロナの影響があったので、外に出られない状況で、せめて季節を感じる美味しい物を家族に送ってあげたいと考え、果実の通販サイトを利用した。

かなり充実している印象があり、選んでいて楽しかったが、岩手県が一番力を入れているインターネット通販はどこか。

#### ○高橋真博流通課流通改善担当課長

通販サイトの名前でいうと、花巻出身の高橋氏がやられている食べる通信の關係のサイトであるとか、食べチョクであるとか、学校給食等では、県内はそうでもなかったが、全国的に給食が停止になったときに、豊洲市場でもサイトを開設した。

そういったところと連携したり、また、農家それぞれが選択肢を持たなければならないので、ヤフーと連携した説明会を実施したりしている。

県が独自にサイトを作るのは難しいが、民間のサイトについて、まずは農家にどういったメリットがあるかの説明会を通じて、自分たちでそれらのサイトを選んでいく取組を実施している。

また、地方紙の通販サイトの47CLUBとも連携した取組も実施している。

#### ○渡邊るみ委員

今伺ったサイトに到達できていないのが残念で、どうやったら到達できるのかと思っている。もしかしたら私が到達できないだけなのか、到達できる仕組みにまだなっていないのか、どういう課題があるのかわからないが。

今年、私が所属しているりんどう開発で育てているエンジェルウィングスという白い葉っぱで花が咲かない植物の販売を手がけているが、お客様から通販で販売して欲しいという要望があり、冬から通販を始めたのがきっかけで、具体的にはJAタウンにお世話になっている。

各サイトで一長一短あるが、JAタウンは農家、生産者にすごく都合のいいサイトで、出荷日を決めておらず、自分の都合で出荷できるというのがすごく楽だ。

本来、自分が窓口になってやろうと思っていたが、最終的には生産者が自ら出荷できしており、すごく取り組みやすいサイトがあると気付いた。

ただ、どうしても手数料がかかってしまい、強いて言えばサイトが洗練されていないのが、本当にもったいないと感じている。

せっかくいいツールがあっても、それが本来のターゲットに届いていなかったり、うまくコミュニケーションが取れていなかったりすることがもったいないと感じている。

生産者が取り組む際に、自分で探すのはハードルが高いので、いろいろな選択肢を用意しつつ、成功事例を提示することで、生産者はとっつきやすくなるのではないかと。

#### ○高橋真博流通課流通改善担当課長

コロナ渦の中でいろいろなサイトが立ち上がっている。消費者にとっては、どうやって到達できるかという状況で、自分で選んで見つけていく状況。

農家も出展する知識やノウハウが必要。JAタウンは、農協の組織なので、そういったところが親身になってやっている。

あとは、手数料がそれぞれのサイトによってまちまちであったり、生産者の声を消費者にフィードバックできるような、双方向で交流ができるサイトがあったり、いろんなサイトがあり、群雄割拠な状態である。

#### ○渡邊るみ委員

インターネットで検索したときに出てこないということは、今やこの世の中に存在しないのと同じなので、そこも充実しつつ、他の方法も充実させる必要がある。

#### ○高橋真博流通課流通改善担当課長

ネットばかり評価という話ではなく、先ほどお話したとおり、若い世代は果物を食べないので、そういった世代にはこういうアプローチ、ある程度果物を消費する年配の方々には別のアプローチといったように、層を分けてアプローチしていくことが重要だと考えている。

#### ○塚本知玄委員

層を分けるという話があったが、今の学生たちはインターネットを習ったわけでもないのに人から聞いて、すごく簡単になんの違和感もなくやってしまう。

そのため、年配者のためのインターネット戦略ではなく、若い人と年配者を繋げるような、お年寄りを助けるような、そういうネットワークがあると、いいのではないかと考えている。

#### ○佐々木誠二農産園芸課総括課長

ご意見として、そういった仕組みについても情報収集しながら、取り組んでいきたい。

#### ○佐藤崇史委員

資料1-1のりんごのジョイント仕立てについて、確かに作業効率は上がって楽だが、果実の品質、規格については、贈答用には厳しい。一般家庭用のものがとれて、コストがかかっていないので、採算ベースは合うという話を聞いている。

スマート農業にしる、新たな栽培方法にしる、推し進めるのはいいが、推し進めるだけにならないように。農家自身もそれぞれ、自分の都合にあった選択をすると思うが、一般用だけでは需要に応えられないので、江刺など、岩手県の場合は高級路線の引きが強いので、それもやりながら、適期を分散しながら、それぞれ農家の工夫が進んでいくのだと思う。ジョイント仕立てもまだ始まったばかりで、あまりとれたことがない状態なのでこれからなのだと思う。

また、果樹におけるスマート農業について、スマート農業機械と書いているが、果樹におけるスマート農業機械とはどんなものを想定しているか。

#### ○佐々木誠二農産園芸課総括課長

果樹におけるスマート農業機械については、具体的には花巻のメーカーが開発した草刈り機が試験的に一部りんご畑に入っており、割と好評を得ている。そういった草刈の手間を省くところを、一つは想定している。

通常の畑作や水稻のように、大きなコンバインや自動操舵のトラクターといった機械

についてはなかなか入りづらい。金額的には100万円以下ではあるが、そういった草刈り機が開発されているので、そういった部分は進めたいと考えている。

#### ○佐藤崇史委員

機械と記載すると大きい機械を想像すると思うが、果樹は草刈り機よりも、出荷・集荷のアシストスーツの方が需要があると思う。アシストスーツの価格は意外と高いので、その辺について、うまい方法があればと考えている。

スマート農業については、やらなければならないと思う。県もしっかりと明記しているので、うまい形で広がることを期待している。

### (2) 岩手県酪農・肉用牛生産近代化計画（案）について

米谷仁畜産課総括課長が、資料2-1、2-2、2-3により説明。

#### 【主な意見等】

##### ○照井勝也委員

肉用牛について、計画案では令和12年度の目標が飼養頭数104,800頭（118.2%）となっている。

小さい農家が辞めて、戸数が減っている中で、経営が続いているところは規模が大きくなっているのが現状。北上市の農家を見ても、後継者がいない農家が何戸かある。

繁殖農家は肥育農家に比べ元気がある印象がある。コロナの影響で、枝肉相場が下がり、今は回復したが、依然として子牛価格が高い状況である。

当社も、肥育一本だったが、一貫経営にした経緯がある。

肉用牛に力を入れている農家については、一貫経営にもっていけるような指導・誘導をしたほうがいい。肥育農家がいなくなると、繁殖農家もダメになる。

子牛価格も下がっており、繁殖農家の経営も大変かもしれないが、肥育農家の経営が良くなれば繁殖農家ももつと感じている。

人材の確保育成について、新規就農者が増えているが、離農者もいる現状なので、とにかく人材の確保育成が重要。当社では、東京都や大阪府での採用活動を行っているが、県内の市町村のサポート体制に温度差を感じる。北上市に話をしたこともあるが、東京都などには出てきてくれないので、県からも指導をお願いします。

##### ○米谷仁畜産課総括課長

子牛価格が高い状況ではある。

県としては一貫経営を進めていかなければならないと考えているので、肥育農家がうまく繁殖部門に取り組めるような支援を考えていきたい。

新規就農者について、これまで、酪農ヘルパーが離農者の畜舎を継承したり、地域の方が離農予定者の手伝いをしながら牛舎を引き継ぐ事例が何件かある。畜産の場合は、母屋の近くに牛舎があることが多いので、他人をすぐに受け入れることは難しいが、そういったことを払拭しながら、畜舎や牛、草地、機械等の経営資源を継承していけるよ

うにしたい。そういった新規就農希望者を応援していきたい。

#### ○磯田朋子委員

国産飼料基盤の強化について、食料自給率向上にいい取組だと思っているが、平成30年度のトウモロコシの収穫量が平成25年度比で減少しているとの記載がある。今後、飼料生産を拡大していく計画となっているが、どの程度拡大するのか、また、どのように生産拡大を図っていくのか。

また、東日本大震災からの復旧について、放射性物質の検査を引き続きするとされているが、未だに放射性物質が出ているのか。出ているのであれば、どのくらいまで検査を続けるのか。

#### ○米谷仁畜産課総括課長

トウモロコシの収穫量については、天候に左右される部分があるので、波がある。増産していく計画とはしている。

#### ○坂田健一畜産課畜政担当課長

放射性物質検査について、牧草の検査と牛の出荷の検査がある。

牧草については、県南の一部で、放射性セシウム濃度が100ベクレルを下回らない地域があるので、その地域については、規制と検査をしながら対処していく。

牛の出荷については、平成31年3月28日付けで、出荷制限は事実上解除されているが、宮城県、福島県等の状況も踏まえて、安全性を確認するために、モニタリング検査を実施している。実際、当県では50ベクレルを上回る牛は出ていない状況である。

いずれ、安全性を他県と足並みをそろえて確認している状況。安全・安心な牛肉を供給する仕組みになっている。

#### ○佐藤崇史委員

コロナ渦でインバウンドが減少。国では輸出の拡大を計画している。

牛肉の輸出に関して、岩手県で輸出に対応した処理場は、どのようになっているか。また、輸出に対応した港、空港の現状を教えてください。今の規模で足りるのか、足りないのか。

国の方針で、中小規模、家族経営といわれているが、10頭未満の農家は、兼業農家であったり、後継者に恵まれていなかったりする場合がある。このような農家の規模拡大について、どのようにしていくのか。

#### ○高橋真博流通課流通改善担当課長

食肉処理加工施設については、紫波町の(株)いわちくが輸出の施設認定を受けている。具体的には、アメリカやシンガポールなど、それぞれの国に応じた輸出認定を受けている。いわちくは、いろいろな国の輸出認定を受けており、特に、アメリカの認定を

受けるのが厳しいが、その水準を満たしているので様々な国に対応できる状況。

港については、釜石港が動植物の検疫の支所であり、職員も駐在しており、釜石港から輸出できるようになっている。今年は釜石港の国際定期航路を使って、牛肉をタイ方面等にもっていつている。ただし、基本的に多いのは京浜、関東方面。

いわちくのキャパシティについては、県内の処理のほかにも、県外からも委託されて処理している。他県にはそういった施設がない点が優れている。その面では、委託も含めて、輸指向けは順調である。稼働率も低くなく、インバウンド需要はないが、輸出は上向きになっている。

#### ○米谷仁畜産課総括課長

小規模農家について、牛専業ではない場合があるが、県全体で飼養頭数を維持していくためには、経営を継続していただくことが第一と考えている。

技術指導や地域の公共牧場を使い省力化しながら、うまく経営を継続させていきたいと考えている。

#### ○佐藤崇史委員

規模拡大と書いているが、基本的には維持が大前提で、余力や事業継承していく中でチャンスがあれば規模拡大していくという解釈で良いか。

#### ○米谷仁畜産課総括課長

お見込みのとおり。新たな計画では、10頭未満飼養農家の経営維持と、10頭以上飼養農家の経営規模拡大を掲げている。

## 4 その他

#### ○梶田佐知子委員

生産者と消費者のつながりを元気にしなければならないと考えている。生産を拡大していくためには、普段の食事に岩手の牛肉やりんごを食べることが重要だと感じている。当連絡協議会でいろいろな県を伺うので、各県の特色を知ることが出来るが、一般の消費者と生産者のつながりをもっと元気になるような販売でなければと考えている。また、来年、当連絡協議会で大きな大会がある。研修大会も楽しみだが、食べ物も地産地消の物がホテルの食事に出るような仕組みを考えていただきたい。

また、来年6月に産業文化会館で農林水産省のコンクールの表彰式があるが、国の方から消費者の取組について問い合わせがあり、そのことについて県に問い合わせをしたところわからない状況であった。県としてアンテナを高く張っていただけて、そういった情報も流していただければと思う。

## 5 閉会